

Oracle® Fusion Middleware Application Adapters

Oracle WebLogic Server Application Adapter
アップグレード・ガイド

12c リリース 1 (12.1.3.0.0)
E61976-02

2014 年 9 月

Oracle Application Adapters for Oracle WebLogic Server を
10.1.3.x から 12c にアップグレードする方法について説明し
ます。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporation およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java はオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することができます。Oracle Corporation およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。Oracle Corporation およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	v
ドキュメントのアクセシビリティについて	v
関連ドキュメント	v
表記規則	vi
1 移行ユーティリティ	
J2CA 移行ユーティリティ	1-1
スタート・ガイド	1-2
J2CA 移行ユーティリティの構造	1-2
J2CA 移行ユーティリティの起動	1-2
移行モード	1-3
完全移行の構成	1-3
リポジトリのコピー	1-3
新規リポジトリからの削除	1-4
ダンプ・ユーティリティの使用	1-5
アップロード・ユーティリティの使用	1-7
部分移行の構成	1-7
diff ユーティリティの使用	1-8
CSV ファイルの編集	1-8
挿入ユーティリティの使用	1-9
サポートされるシナリオ	1-9
完全移行および部分移行の使用上の注意	1-10
BSE 移行ユーティリティ	1-10
スタート・ガイド	1-11
BSE 移行ユーティリティの構造	1-11
BSE 移行ユーティリティの起動	1-12
移行モード	1-12
完全移行の構成	1-12
リポジトリのコピー	1-12
新規リポジトリからの削除	1-13
ダンプ・ユーティリティの使用	1-14
アップロード・ユーティリティの使用	1-16
部分移行の構成	1-16
diff ユーティリティの使用	1-17

CSV ファイルの編集.....	1-17
挿入ユーティリティの使用	1-18
サポートされるシナリオ	1-18
完全移行および部分移行の使用上の注意.....	1-19

2 一般的なアップグレード・ガイドライン

11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド OSB プロセスの 12c へのアップグレード.....	2-1
Oracle Service Bus 11g PS6 からの構成済プロセスのエクスポート	2-1
Oracle Service Bus 12c へのエクスポート済プロセスのインポート	2-3
Oracle Service Bus 12c でのインポート済プロセスの追加変更.....	2-7
インポートされた BSE アウトバウンド・プロセス	2-7
11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPEL およびメディエータ・プロセスの 12c への アップグレード.....	2-9
12c での移行済プロセスの追加変更.....	2-14
11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPMN プロセスの 12c へのアップグレード.....	2-15
12c での移行済プロセスの追加変更	2-18

索引

はじめに

『Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter アップグレード・ガイド』にようこと。このドキュメントでは、Oracle Application Adapters for Oracle WebLogic Server を 10.1.3.x から 12c にアップグレードする方法について説明します。

対象読者

このドキュメントは、Oracle Application Adapters for Oracle WebLogic Server を 10.1.3.x から 12c にアップグレードするシステム管理者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>) を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

お客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>) か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>) を参照してください。

関連ドキュメント

詳細は、Oracle Enterprise Repository 12c リリース 1 (12.1.3.0.0) ドキュメント・セット内の次のドキュメントを参照してください。

- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapters インストレーション・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter ベスト・プラクティス・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for SAP R/3 (SAP JCo 3.0) ユーザーズ・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for Siebel ユーザーズ・ガイド*

- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for PeopleSoft ユーザーズ・ガイド*
- *Oracle Fusion Middleware Oracle WebLogic Server Application Adapter for J.D. Edwards OneWorld ユーザーズ・ガイド*
- Oracle Unified Method (OUM)

Oracle Unified Method (OUM) では、その他の管理情報を豊富に提供しています。OUM は、オラクル社の従業員、パートナ・ネットワーク認定パートナや認定アドバンテージ・パートナとともに、OUM 顧客プログラム、またはオラクル社によるコンサルティング・サービス提供プロジェクトにご参加いただいているお客様にもご利用いただけます。OUM はソフトウェア開発および実装プロジェクトの計画、実施、管理用の Web デプロイ型ツールキットです。

OUM の詳細は、次の場所にある OUM FAQ を参照してください。

http://my.oracle.com/portal/page/myo/ROOTCORNER/KNOWLEDGEAREAS1/BUSINESSES_PRACTICE/Methods/Learn_about_OUM.html

表記規則

このドキュメントでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

移行ユーティリティ

この章では、移行ユーティリティを構成および使用して、Oracle Application Adapter のターゲット、チャネルおよび Web サービスを、J2CA 環境と BSE 環境間で移行する方法について説明します。移行ユーティリティを使用して、開発環境、テスト環境および本番環境から、アダプタ・リポジトリを移行できます。リポジトリは、完全に移行することも、アーティファクト用に部分的に移行することもできます。この章の内容は次のとおりです。

- [1.1 項「J2CA 移行ユーティリティ」](#)
- [1.2 項「BSE 移行ユーティリティ」](#)

注意: このドキュメントでは、<ORACLE_HOME> は、12c がインストールされているホームの場所を指します。

このドキュメントでは、<ADAPTER_HOME> は、次の場所を指します。

SOA の場合:

<ORACLE_HOME>\soa\soa\thirdparty\ApplicationAdapters

OSB の場合:

<ORACLE_HOME>\osb\3rdparty\ApplicationAdapters

1.1 J2CA 移行ユーティリティ

J2CA 移行ユーティリティは、Oracle Application Adapter のターゲットおよびチャネルを環境間で移行するために使用されます。この移行ユーティリティを使用して、開発環境、テスト環境および本番環境から、J2CA コンテナ内のアダプタ・リポジトリを移行できます。リポジトリは、完全に移行することも、これらのアーティファクト用に部分的に移行することもできます。

J2CA 移行ユーティリティは次をサポートしています。

- J2CA のみの構成
- 次の Oracle Application Adapter:
 - SAP R/3
 - Siebel
 - PeopleSoft
 - J.D. Edwards
- リポジトリとしての Oracle、MSSQL および DB2 データベース。

- 次の移行：
 - ファイルからデータベース・リポジトリ
 - データベースからデータベース・リポジトリ

この項の内容は次のとおりです。

- [1.1.1 項「スタート・ガイド」](#)
- [1.1.2 項「完全移行の構成」](#)
- [1.1.3 項「部分移行の構成」](#)
- [1.1.4 項「完全移行および部分移行の使用上の注意」](#)

1.1.1 スタート・ガイド

この項の内容は次のとおりです。

- [1.1.1.1 項「J2CA 移行ユーティリティの構造」](#)
- [1.1.1.2 項「J2CA 移行ユーティリティの起動」](#)
- [1.1.1.3 項「移行モード」](#)

1.1.1.1 J2CA 移行ユーティリティの構造

J2CA 移行ユーティリティは、次のような構造です。

- <ADAPTER_HOME>\etc\util の下にある次のファイルが使用可能です。
 - *iwrepocmd.jar* - 移行ユーティリティの .jar ファイル。

注意: この .jar ファイルは、移行以外の目的で使用しないでください。このファイルは、アダプタがデザインタイムまたはランタイム時に実行している際に、クラスパスまたはその他のパスに含めないでください。

- *jcaupd.bat* - Windows プラットフォームで使用する必要があるスクリプト。
- *jcaupd.sh* - UNIX および Linux プラットフォームで使用する必要があるスクリプト。
- データベースの JDBC ドライバ・ファイルを次のディレクトリにコピーします。
<ADAPTER_HOME>/lib

データベースの JDBC ドライバ・ファイルにより、移行ユーティリティはソースおよびターゲットのデータベース・リポジトリに接続できます。

1.1.1.2 J2CA 移行ユーティリティの起動

J2CA 移行ユーティリティの使用を開始するには、次の手順を実行します。

1. コマンド・ウィンドウを開いて次のディレクトリに移動します。
<ADAPTER_HOME>/etc/util
2. 説明に従って、*jcaupd* コマンドを実行します。

1.1.1.3 移行モード

移行ユーティリティでは、次の 2 つの移行モードを使用できます。

- **完全。** このモードでは、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよびチャネルのすべてを移行します。詳細は、1-3 ページ [1.1.2 項「完全移行の構成」](#) を参照してください。
- **部分。** このモードでは、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよびチャネルの部分的なリストを移行します。詳細は、1-7 ページ [1.1.3 項「部分移行の構成」](#) を参照してください。

注意： このガイドで使用されているすべてのデータベース・リポジトリ・コマンドは、Oracle データベースを指します。MSSQL および DB2 データベースの場合、適切な接続 URL およびデータベース・ドライバを使用します。DB2 および MSSQL リポジトリの例は、1-12 ページ [1.2.2.1 項「リポジトリのコピー」](#) を参照してください。

移行ユーティリティ・コマンドの実行時には(移行プロセス全体にわたって)、アプリケーション・エクスプローラおよび Oracle Application Server が稼働しておらず、停止していることを確認してください。これは、ソース環境とターゲット環境に当てはまります。

1.1.2 完全移行の構成

この項では、完全移行の構成方法について説明し、内容は次のとおりです。

- [1.1.2.1 項「リポジトリのコピー」](#)
- [1.1.2.2 項「新規リポジトリからの削除」](#)
- [1.1.2.3 項「ダンプ・ユーティリティの使用」](#)
- [1.1.2.4 項「アップロード・ユーティリティの使用」](#)

完全移行では、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよびチャネルのすべてを挿入します。このプロセスの手順は次のとおりです。

1. リポジトリのコピー。
2. 新規リポジトリからの不要なターゲットおよびチャネルの削除。
3. CSV または XML ファイルへの新規リポジトリのコンテンツのダンプ。
4. リポジトリ・コンテンツの編集。
5. 新規リポジトリへの変更のアップロード。

1.1.2.1 リポジトリのコピー

この項では、ソース・リポジトリをターゲット・リポジトリにコピーする方法について説明します。

1. コピー・コマンドには次の構文を使用します。

```
jcaupd copy jca fromrepo torepo
```

ここで、`jca` は、アプリケーション・エクスプローラで作成された J2CA 構成の名前です。

2. 各リポジトリの引数は、次の形式を使用できます。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

- たとえば、ファイルベースのリポジトリを Oracle データベース・リポジトリにコピーするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd copy jca_sample -file C:\repository.xml -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh copy jca_sample -file /rdbms/ora117/repository.xml -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
```

- たとえば、データベース・リポジトリを別のデータベース・リポジトリにコピーするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd copy jca_sample
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway
scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2
scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh copy jca_sample
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway
scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2
scott tiger
```

注意： 宛先リポジトリがデータベースの場合、データが含まれていない新規作成されたデータベースである必要があります。ファイルの場合、コピー・コマンドを実行する前にファイルが存在しないようにする必要があります。

データベース・リポジトリの場合、リポジトリの作成に使用され、J2CA で構成されている、同じ資格証明であることを確認してください。移行や他のタスクに別の資格証明を使用しないでください。

1.1.2.2 新規リポジトリからの削除

ソース・リポジトリから新規リポジトリを作成した後、必要なくなったアダプタ・ターゲットおよびチャネルを削除できます。

- 次の構文を使用して、リポジトリからエントリを削除します。

アダプタ・ターゲットを削除する場合：

```
jcaupd deltarget jca adapter target repo
```

チャネルを削除する場合：

```
jcaupd delchannel jca adapter channel repo
```

- リポジトリの引数は、次の形式を使用できます。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

- たとえば、ファイル・リポジトリからエントリを削除するには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合:

```
jcaupd deltargt jca_sample MySAP sap_target -file C:\repository.xml
jcaupd delchannel jca_sample MySAP sap_ch -file C:\repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合:

```
./jcaupd.sh deltargt jca_sample MySAP sap_target -file
/rdbms/ora117/repository.xml
./jcaupd.sh delchannel jca_sample MySAP sap_ch -file
/rdbms/ora117/repository.xml
```

- たとえば、DB リポジトリからエントリを削除するには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合:

```
jcaupd deltargt jca_sample MySAP sap_target -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
jcaupd delchannel jca_sample MySAP sap_ch -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合:

```
./jcaupd.sh deltargt jca_sample MySAP sap_target -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
./jcaupd.sh delchannel jca_sample MySAP sap_ch -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
```

注意: この手順のコマンドでは、指定された 1 つのレコードのみを削除します。意図しない悪影響をもたらす可能性があるため、アダプタ・キーを削除するためのコマンドは示していません。

1.1.2.3 ダンプ・ユーティリティの使用

ダンプ・ユーティリティは、J2CA リポジトリのコンテンツを、カンマ区切り値 (CSV) ファイルに書き込みます。CSV ファイルは Microsoft Excel で開くことができます。

- ダンプ・ユーティリティには次の構文を使用します。

```
jcaupd dump jca file [-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

注意: ファイル名が .xml 拡張子で終わっている場合、XML ファイルが生成されます。それ以外の場合、タブ区切りのファイルが生成されます。

- たとえば、ファイル・リポジトリから詳細をダンプするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合:

```
jcaupd dump jca_sample repo.csv -file C:\repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合:

```
./jcaupd.sh dump jca_sample repo.csv -file /rdbms/ora117/repository.xml
```

- たとえば、データベース・リポジトリから詳細をダンプするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合:

```
jcaupd dump jca_sample repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合:

```
./jcaupd.sh dump jca_sample repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

- プログラムにより、次の情報がダンプされます。

- すべてのアダプタ・ターゲットの名前および接続パラメータ。
- すべてのチャネルの名前および接続パラメータ。
- すべてのポート。
- すべてのアダプタのアダプタ・キーおよび値。

図 1-1 に示すように、ダンプ・ユーティリティは一般的に、「アダプタ」、「ターゲット」、「キー」および「値」のキー行には何もドロップしません。

図 1-1 キー行

Keys	Adapter	Target	Key	Value

通常、キー表に何かが表示されるのは、アダプタの相互作用を使用してメタデータ・ツリーにノードを追加した場合のみです。

生成されたファイルは、Microsoft Excel などのスプレッドシート・プログラムを使用して、表示および編集できます。ファイルの編集時に、次のアクションが実行されていないことを確認してください。

- ターゲット名やチャネル名などの変更。フィールド値のみを編集する必要があります。
- ファイルへの新規行または列の追加。
- ファイルからの行または列の削除。オブジェクトは、コマンドライン・ツールを使用してのみ削除できます。
- ドロップダウン・リストのパラメータを変更する場合、サポートされている値のみ指定します。それ以外の場合、ファイルのアップロード時に、アプリケーション・エクスプローラでターゲット・パラメータがリストされません。
- ブール値を true または false 以外に変更することは、推奨されません。

パスワード値は、暗号化された文字列としてファイルに表示されます。新規パスワードをプレーン・テキストとして入力するか、以前の暗号化されたパスワードをそのまま使用できます。パスワードがプレーン・テキストの場合、アップロード・ツールによって、ファイルのアップロード時にパスワードが自動的に暗号化されます。

1.1.2.4 アップロード・ユーティリティの使用

アップロード・ユーティリティを使用して、CSV ファイルの詳細をリポジトリにロードして戻すことができます。

1. アップロード・ユーティリティには次の構文を使用します。

```
jcaupd load jca file [-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

2. たとえば、ファイル・リポジトリにエントリをアップロードするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd load jca_sample repo.csv -file C:\repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh load jca_sample repo.csv -file /rdbms/ora117/repository.xml
```

3. たとえば、データベース・リポジトリにエントリをアップロードするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd load jca_sample repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh load jca_sample repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

注意： ユーティリティは、CSV ファイルに指定されたとおりの値を使用して既存のレコードを変更します。レコードの作成または削除はできません。

1.1.3 部分移行の構成

この項では、部分移行の構成方法について説明し、内容は次のとおりです。

- [1.1.3.1 項「diff ユーティリティの使用」](#)
- [1.1.3.2 項「CSV ファイルの編集」](#)
- [1.1.3.3 項「挿入ユーティリティの使用」](#)
- [1.1.3.4 項「サポートされるシナリオ」](#)

部分移行では、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリに選択したターゲット、チャネルおよびポートを挿入します。ターゲット・リポジトリは空であってもそうでなくともかまいません。このプロセスの手順は次のとおりです。

1. diff ユーティリティを使用した、ソース・リポジトリにあるがターゲット・リポジトリにないオブジェクトが含まれる CSV ファイルの作成。
2. ターゲット・リポジトリで不要なオブジェクトの CSV ファイルからの削除。
3. CSV ファイルのオブジェクト・パラメータの編集。
4. 挿入ユーティリティを使用した、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリへのレコードの追加。

1.1.3.1 diff ユーティリティの使用

diff ユーティリティには次の構文を使用します。

```
jcaupd diff jca file source target
```

source および *target* 指定は、次の形式を使用します。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

diff ユーティリティは、ダンプ・ユーティリティが生成するファイルと同一の構造のファイルを生成しますが、ソース・リポジトリに存在し、宛先リポジトリには存在しないオブジェクトのみが含まれます。

次の例は、ソース・リポジトリとターゲット・リポジトリ間で diff ユーティリティを実行する方法を示しています。

ファイル・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での diff ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd diff jca_sample jca_diff.csv -file C:\repository.xml -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh diff jca_sample jca_diff.csv -file /rdbms/ora117/repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott
tiger
```

データベース・リポジトリ (ソース) と別のデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での diff ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd diff jca_sample jca_diff.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh diff jca_sample jca_diff.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

1.1.3.2 CSV ファイルの編集

CSV ファイルを修正して、値を変更できます。アダプタ・ターゲットおよびチャネルの値を変更する際は注意してください。アーティファクトを削除する場合、その依存関係も削除していることを確認してください。CSV ファイルでは、次のアクションが許可されています。

- アダプタ・ターゲットの接続パラメータおよびチャネルのパラメータの値の変更。
- アダプタのターゲットおよびチャネルなど、アーティファクトの削除。

1.1.3.3 挿入ユーティリティの使用

挿入ユーティリティには次の構文を使用します。

```
jcaupd insert jca file source target
```

source および *target* 指定は、次の形式を使用します。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

次の例は、ソース・リポジトリとターゲット・リポジトリ間で挿入ユーティリティを実行する方法を示しています。

ファイル・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での挿入ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd insert jca_sample jca_diff.csv -file C:\repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott
tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh insert jca_sample jca_diff.csv -file /rdbms/ora117/repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott
tiger
```

データベース・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での挿入ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
jcaupd insert jca_sample jca_diff.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./jcaupd.sh insert jca_sample jca_diff.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

挿入ユーティリティは、ソース・リポジトリの CSV ファイルで識別されたすべてのオブジェクトを宛先リポジトリにコピーします。その後、CSV ファイルで指定された値を使用してオブジェクト・フィールドを更新します。CSV ファイルのすべてのオブジェクトが、ソース・リポジトリに存在している必要があります。

1.1.3.4 サポートされるシナリオ

次のシナリオは、部分移行でサポートされます。この項で示している以外の使用シナリオに関する質問がある場合は、カスタマ・サポートにご連絡ください。

- ソース・リポジトリには、アダプタ・ターゲットのアーティファクトと、各アダプタのチャネルがあります。これらはターゲット・リポジトリに移行されます。ソース・リポジトリに新規アーティファクトが作成されると、新規作成されたアーティファクトのみがターゲット・リポジトリに移行できます。
- ソース・リポジトリには、アダプタ・ターゲットのアーティファクトと、各アダプタのチャネルがあります。これらはターゲット・リポジトリに移行されます。

ソース・リポジトリに新規アーティファクトが作成されると、すべてのアーティファクト（以前および新規）を新規ターゲット・リポジトリに移行できます。

- ソース・リポジトリに Oracle Enterprise Edition、ターゲット・リポジトリに Oracle RAC を使用できます。移行は逆の方向にも実行できます。たとえば、Oracle RAC リポジトリから Oracle Enterprise Edition リポジトリへの移行を実行することもできます。

1.1.4 完全移行および部分移行の使用上の注意

この項では、部分移行および完全移行の使用上の注意について説明します。

ファイル・パス

ファイル・リポジトリを指定する際、ファイルへのフルパスを指定する必要があります。さらに、スペースを含むファイル・パス (C:\Program Files\iway60 など) はユーティリティで使用できません。

JDBC ドライバ

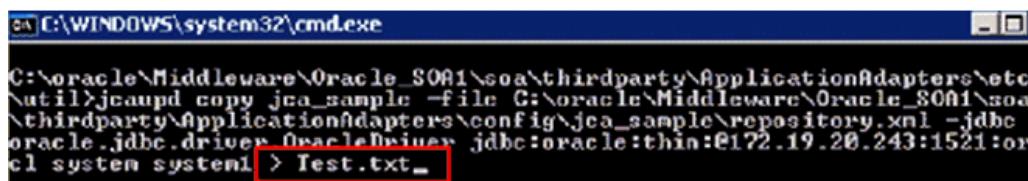
JDBC ドライバは、移行ユーティリティがインストールされている ApplicationAdapters\lib フォルダ内に置く必要があります。

ログ・ファイル

移行ユーティリティでは、ログ・ファイルは生成されません。すべてのロギング情報は標準出力に出力されます。レビューの目的でロギングを取得するには、コマンド・ウィンドウで > 文字を使用して、標準出力をファイルにリダイレクトします。

たとえば、図 1-2 に示すように、コマンド・プロンプトでコマンド > *Filename.txt* を指定します。

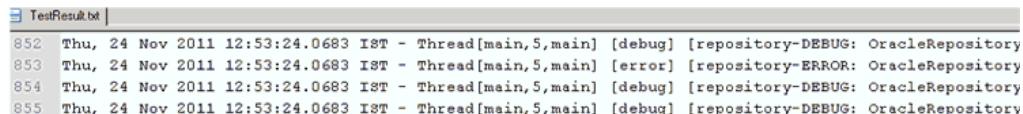
図 1-2 コマンド・プロンプト



```
C:\oracle\Middleware\Oracle_S0A1\soa\thirdparty\ApplicationAdapters\etc\thirdparty\jca\sample\repository.xml -jdbc oracle.jdbc.driver OracleDriver jdbc:oracle:thin:@172.19.20.243:1521:orcl system system > Test.txt
```

図 1-3 に示すように、コマンドの実行が成功すると、指定した場所にテキスト・ファイルが作成され、保存されたテキストを確認できます。

図 1-3 テキスト・ファイル



```
Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository]
Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [error] [repository-ERROR: OracleRepository]
Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository]
Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository]
```

1.2 BSE 移行ユーティリティ

BSE 移行ユーティリティは、Oracle Application Adapter のターゲットおよび Web サービスを環境間で移行するために使用されます。この移行ユーティリティを使用して、開発環境、テスト環境および本番環境から、リポジトリ構成の詳細を移行できます。リポジトリは、完全に移行することも、これらのアーティファクト用に部分的に移行することもできます。

BSE 移行ユーティリティは次をサポートしています。

- BSE のみの構成
- 次の Oracle Application Adapter:
 - SAP R/3
 - Siebel
 - PeopleSoft
 - J.D. Edwards
- リポジトリとしての Oracle、MSSQL および DB2 データベース。
- 次の移行:
 - ファイルからデータベース・リポジトリ
 - データベースからデータベース・リポジトリ

この項の内容は次のとおりです。

- [1.2.1 項「スタート・ガイド」](#)
- [1.2.2 項「完全移行の構成」](#)
- [1.2.3 項「部分移行の構成」](#)
- [1.2.4 項「完全移行および部分移行の使用上の注意」](#)

1.2.1 スタート・ガイド

この項の内容は次のとおりです。

- [1.2.1.1 項「BSE 移行ユーティリティの構造」](#)
- [1.2.1.2 項「BSE 移行ユーティリティの起動」](#)
- [1.2.1.3 項「移行モード」](#)

1.2.1.1 BSE 移行ユーティリティの構造

BSE 移行ユーティリティは、次のような構造です。

- <ADAPTER_HOME>\etc\util の下にある次のファイルが使用可能です。
 - *iwrepocmd.jar* - 移行ユーティリティの .jar ファイル。

注意: この .jar ファイルは、移行以外の目的で使用しないでください。このファイルは、アダプタがデザインタイムまたはランタイム時に実行している際に、クラスパスまたはその他のパスに含めないでください。

- *ibspupd.bat* - Windows プラットフォームで使用する必要があるスクリプト。
- *ibspupd.sh* - UNIX および Linux プラットフォームで使用する必要があるスクリプト。
- データベースの JDBC ドライバ・ファイルを次のディレクトリにコピーします。
`<ADAPTER_HOME>/lib`

データベースの JDBC ドライバ・ファイルにより、移行ユーティリティはソースおよびターゲットのデータベース・リポジトリに接続できます。

1.2.1.2 BSE 移行ユーティリティの起動

BSE 移行ユーティリティの使用を開始するには、次の手順を実行します。

1. コマンド・ウィンドウを開いて次のディレクトリに移動します。

<ADAPTER_HOME>/etc/util

2. 説明に従って、ibspupd コマンドを実行します。

1.2.1.3 移行モード

移行ユーティリティでは、次の 2 つの移行モードを使用できます。

- **完全。** このモードでは、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよび Web サービスのすべてを移行します。詳細は、1-12 ページ [1.2.2 項「完全移行の構成」](#) を参照してください。
- **部分。** このモードでは、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよび Web サービスの部分的なリストを移行します。詳細は、1-16 ページ [1.2.3 項「部分移行の構成」](#) を参照してください。

注意 : このガイドで使用されているすべてのデータベース・リポジトリ・コマンドは、Oracle データベースを指します。MSSQL および DB2 データベースの場合、適切な接続 URL およびデータベース・ドライバを使用します。DB2 および MSSQL リポジトリの例は、1-12 ページ [1.2.2.1 項「リポジトリのコピー」](#) を参照してください。

移行ユーティリティ・コマンドの実行時には(移行プロセス全体にわたって)、アプリケーション・エクスプローラおよび Oracle Application Server が稼働しておらず、停止していることを確認してください。これは、ソース環境とターゲット環境に当たります。

1.2.2 完全移行の構成

この項では、完全移行の構成方法について説明し、内容は次のとおりです。

- [1.2.2.1 項「リポジトリのコピー」](#)
- [1.2.2.2 項「新規リポジトリからの削除」](#)
- [1.2.2.3 項「ダンプ・ユーティリティの使用」](#)
- [1.2.2.4 項「アップロード・ユーティリティの使用」](#)

完全移行では、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリにターゲットおよび Web サービスのすべてを挿入します。このプロセスの手順は次のとおりです。

1. リポジトリのコピー。
2. 新規リポジトリからの不要なターゲットおよび Web サービスの削除。
3. CSV または XML ファイルへの新規リポジトリのコンテンツのダンプ。
4. リポジトリ・コンテンツの編集。
5. 新規リポジトリへの変更のアップロード。

1.2.2.1 リポジトリのコピー

この項では、ソース・リポジトリをターゲット・リポジトリにコピーする方法について説明します。

1. コピー・コマンドには次の構文を使用します。

```
ibspupd copy fromrepo torepo
```

2. 各リポジトリの引数は、次の形式を使用できます。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

3. たとえば、ファイルベースのリポジトリを Oracle データベース・リポジトリにコピーするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd copy -file C:\ibse_repository.xml -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh copy -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott
tiger
```

4. たとえば、データベース・リポジトリを別のデータベース・リポジトリにコピーするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd copy
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway
scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2
scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh copy
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway
scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2
scott tiger
```

注意： 宛先リポジトリがデータベースの場合、データが含まれていない新規作成されたデータベースである必要があります。

データベース・リポジトリの場合、リポジトリの作成に使用され、BSE で構成されている、同じ資格証明であることを確認してください。移行や他のタスクに別の資格証明を使用しないでください。

1.2.2.2 新規リポジトリからの削除

ソース・リポジトリから新規リポジトリを作成した後、必要なくなったアダプタ・ターゲットおよび Web サービスを削除できます。

1. 次の構文を使用して、リポジトリからエントリを削除します。

アダプタ・ターゲットを削除する場合：

```
ibspupd deltarger adapter target repo
```

Web サービスを削除する場合：

```
ibspupd delservice WebService_Name repo
```

- リポジトリの引数は、次の形式を使用できます。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

- たとえば、ファイル・リポジトリからエントリを削除するには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd delservice sap_service -file C:\ibse_repository.xml
ibspupd deltargt MySAP sap_target -file C:\ibse_repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh delservice sap_service -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
./ibspupd.sh deltargt MySAP sap_target -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
```

- たとえば、DB リポジトリからエントリを削除するには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd delservice sap_service -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:orcl scott tiger
ibspupd deltargt MySAP sap_target -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:orcl scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh delservice sap_service -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:orcl scott tiger
./ibspupd.sh deltargt MySAP sap_target -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:orcl scott tiger
```

注意： `delservice` コマンドにより、Web サービスのエントリがサービスおよびメソッド表から削除されます。この手順のコマンドでは、指定された 1 つのレコードのみを削除します。意図しない悪影響をもたらす可能性があるため、アダプタ・キーを削除するためのコマンドは示していません。

1.2.2.3 ダンプ・ユーティリティの使用

ダンプ・ユーティリティは、BSE リポジトリのコンテンツを、カンマ区切り値 (CSV) ファイルに書き込みます。CSV ファイルは Microsoft Excel で開くことができます。

- ダンプ・ユーティリティには次の構文を使用します。

```
ibspupd dump csvfile [-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

- たとえば、ファイル・リポジトリから詳細をダンプするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd dump repo.csv -file C:\ibse_repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh dump repo.csv -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
```

- たとえば、データベース・リポジトリから詳細をダンプするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合:

```
ibspupd dump repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合:

```
./ibspupd.sh dump repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

- プログラムにより、次の情報が CSV ファイルにダンプされます。

- 各サービスのサービス名、アダプタ、ターゲットおよびターゲット・パラメータ。
- すべてのアダプタ・ターゲットの名前および接続パラメータ。
- すべてのアダプタのアダプタ・キーおよび値。

図 1-4 に示すように、ダンプ・ユーティリティは一般的に、「アダプタ」、「ターゲット」、「キー」および「値」のキー行には何もドロップしません。

図 1-4 キー行

Keys	Adapter	Target	Key	Value

通常、キー表に何かが表示されるのは、アダプタの相互作用を使用してメタデータ・ツリーにノードを追加した場合のみです。

生成されたファイルは、Microsoft Excel などのスプレッドシート・プログラムを使用して、表示および編集できます。ファイルの編集時に、次のアクションが実行されていないことを確認してください。

- ターゲット名やサービス名などの変更。フィールド値のみを編集する必要があります。
- ファイルへの新規行または列の追加。
- ファイルからの行または列の削除。オブジェクトは、コマンドライン・ツールを使用してのみ削除できます。
- ドロップダウン・リストのパラメータを変更する場合、サポートされている値のみ指定します。それ以外の場合、ファイルのアップロード時に、アプリケーション・エクスプローラでターゲット・パラメータがリストされません。
- ブール値を true または false 以外に変更することは、推奨されません。

パスワード値は、暗号化された文字列としてファイルに表示されます。新規パスワードをブレーン・テキストとして入力するか、以前の暗号化されたパスワードをそのまま使用できます。パスワードがブレーン・テキストの場合、アップロード・ツールによって、ファイルのアップロード時にパスワードが自動的に暗号化されます。

1.2.2.4 アップロード・ユーティリティの使用

アップロード・ユーティリティを使用して、CSV ファイルの詳細をリポジトリにロードして戻すことができます。

1. アップロード・ユーティリティには次の構文を使用します。

```
ibspupd load csvfile [-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

2. たとえば、ファイル・リポジトリにエントリをアップロードするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd load repo.csv -file C:\ibse_repository.xml
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh load repo.csv -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
```

3. たとえば、データベース・リポジトリにエントリをアップロードするには、次の構文を使用します。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd load repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh load repo.csv -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger
```

注意： ユーティリティは、CSV ファイルに指定されたとおりの値を使用して既存のレコードを変更します。レコードの作成または削除はできません。

1.2.3 部分移行の構成

この項では、部分移行の構成方法について説明し、内容は次のとおりです。

- [1.2.3.1 項「diff ユーティリティの使用」](#)
- [1.2.3.2 項「CSV ファイルの編集」](#)
- [1.2.3.3 項「挿入ユーティリティの使用」](#)
- [1.2.3.4 項「サポートされるシナリオ」](#)

部分移行では、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリに選択した Web サービスおよびターゲットを挿入します。ターゲット・リポジトリは空であってもそうでなくともかまいません。このプロセスの手順は次のとおりです。

1. diff ユーティリティを使用した、ソース・リポジトリにあるがターゲット・リポジトリにないオブジェクトが含まれる CSV ファイルの作成。
2. ターゲット・リポジトリで不要なオブジェクトの CSV ファイルからの削除。
3. CSV ファイルのオブジェクト・パラメータの編集。
4. 挿入ユーティリティを使用した、ソース・リポジトリからターゲット・リポジトリへのレコードの追加。

1.2.3.1 diff ユーティリティの使用

diff ユーティリティには次の構文を使用します。

```
ibspupd diff csvfile source target
```

source および *target* 指定は、次の形式を使用します。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

diff ユーティリティは、ダンプ・ユーティリティが生成する CSV ファイルと同一の構造の CSV ファイルを生成しますが、ソース・リポジトリに存在し、宛先リポジトリには存在しないオブジェクトのみが含まれます。

次の例は、ソース・リポジトリとターゲット・リポジトリ間で diff ユーティリティを実行する方法を示しています。

ファイル・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での diff ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd diff phase1.csv -file C:\ibse_repository.xml -jdbc
oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh diff phase1.csv -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott tiger
```

データベース・リポジトリ (ソース) と別のデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での diff ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd diff phase1.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2 scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh diff phase1.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2 scott tiger
```

1.2.3.2 CSV ファイルの編集

CSV ファイルを修正して、値を変更できます。アダプタ・ターゲットおよび Web サービスの値を変更する際は注意してください。アーティファクトを削除する場合、その依存関係も削除していることを確認してください。CSV ファイルでは、次のアクションが許可されています。

- アダプタ・ターゲットの接続パラメータおよび Web サービスのパラメータの値の変更。
- アダプタのターゲットおよび Web サービスなど、アーティファクトの削除。

1.2.3.3 挿入ユーティリティの使用

挿入ユーティリティには次の構文を使用します。

```
ibspupd insert csvfile source target
```

source および *target* 指定は、次の形式を使用します。

```
[-jdbc driver url user password | -file repofile]
```

次の例は、ソース・リポジトリとターゲット・リポジトリ間で挿入ユーティリティを実行する方法を示しています。

ファイル・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での挿入ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd insert phase1.csv -file C:\ibse_repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott
tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh insert phase1.csv -file /rdbms/ora117/ibse_repository.xml
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway2 scott
tiger
```

データベース・リポジトリ (ソース) とデータベース・リポジトリ (ターゲット) 間での挿入ユーティリティ。

Windows プラットフォームの場合：

```
ibspupd insert phase1.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

UNIX または Linux プラットフォームの場合：

```
./ibspupd.sh insert phase1.csv
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost1:1521:iway scott
tiger
-jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost2:1521:iway2
scott tiger
```

挿入ユーティリティは、ソース・リポジトリの CSV ファイルで識別されたすべてのオブジェクトを宛先リポジトリにコピーします。その後、CSV ファイルで指定された値を使用してオブジェクト・フィールドを更新します。CSV ファイルのすべてのオブジェクトが、ソース・リポジトリに存在している必要があります。

1.2.3.4 サポートされるシナリオ

次のシナリオは、部分移行でサポートされます。この項で示している以外の使用シナリオに関する質問がある場合は、カスタマ・サポートにご連絡ください。

- ソース・リポジトリには、アダプタ・ターゲットのアーティファクトと、各アダプタの Web サービスがあります。これらはターゲット・リポジトリに移行されます。ソース・リポジトリに新規アーティファクトが作成されると、新規作成されたアーティファクトのみがターゲット・リポジトリに移行できます。
- ソース・リポジトリには、アダプタ・ターゲットのアーティファクトと、各アダプタの Web サービスがあります。これらはターゲット・リポジトリに移行されま

す。ソース・リポジトリに新規アーティファクトが作成されると、すべてのアーティファクト（以前および新規）を新規ターゲット・リポジトリに移行できます。

- ソース・リポジトリに Oracle Enterprise Edition、ターゲット・リポジトリに Oracle RAC を使用できます。移行は逆の方向にも実行できます。たとえば、Oracle RAC リポジトリから Oracle Enterprise Edition リポジトリへの移行を実行することもできます。

1.2.4 完全移行および部分移行の使用上の注意

この項では、部分移行および完全移行の使用上の注意について説明します。

ファイル・パス

ファイル・リポジトリを指定する際、ファイルへのフルパスを指定する必要があります。さらに、スペースを含むファイル・パス (C:\Program Files\iway60 など) はユーティリティで使用できません。

JDBC ドライバ

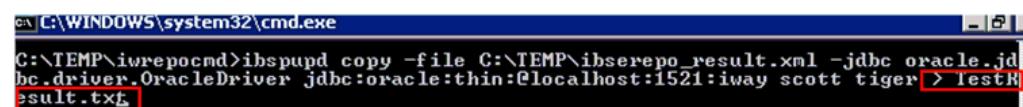
JDBC ドライバは、移行ユーティリティがインストールされている ApplicationAdapters\lib フォルダ内に置く必要があります。

ログ・ファイル

移行ユーティリティでは、ログ・ファイルは生成されません。すべてのロギング情報は標準出力に出力されます。レビューの目的でロギングを取得するには、コマンド・ウインドウで > 文字を使用して、標準出力をファイルにリダイレクトします。

たとえば、図 1-5 に示すように、コマンド・プロンプトでコマンド > *Filename.txt* を指定します。

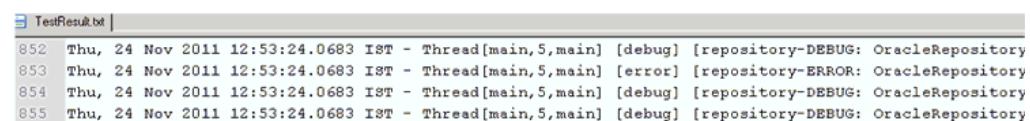
図 1-5 コマンド・プロンプト



```
C:\C:\WINDOWS\system32\cmd.exe
C:\TEMP\iwarepocmd>ibspupd copy -file C:\TEMP\ibserrepo_result.xml -jdbc oracle.jdbc.driver.OracleDriver jdbc:oracle:thin:@localhost:1521:iway scott tiger > TestResult.txt
```

図 1-6 に示すように、コマンドの実行が成功すると、指定した場所にテキスト・ファイルが作成され、保存されたテキストを確認できます。

図 1-6 テキスト・ファイル



```
852 Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository
853 Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [error] [repository-ERROR: OracleRepository
854 Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository
855 Thu, 24 Nov 2011 12:53:24.0683 IST - Thread[main,5,main] [debug] [repository-DEBUG: OracleRepository
```

一般的なアップグレード・ガイドライン

この章では、すべての Oracle Application Adapters for Oracle WebLogic Server と共通する一般的なアップグレード・ガイドラインについて説明します。内容は次のとおりです。

- 2.1 項「11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド OSB プロセスの 12c へのアップグレード」
- 2.2 項「11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPEL およびメディエータ・プロセスの 12c へのアップグレード」
- 2.3 項「11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPMN プロセスの 12c へのアップグレード」

2.1 11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド OSB プロセスの 12c へのアップグレード

この項では、アウトバウンドおよびインバウンド J2CA プロセスとアウトバウンド BSE プロセスを Oracle Service Bus 11g PS6 から 12c に移行する方法について説明します。内容は次のとおりです。

- 2.1.1 項「Oracle Service Bus 11g PS6 からの構成済プロセスのエクスポート」
- 2.1.2 項「Oracle Service Bus 12c へのエクスポート済プロセスのインポート」
- 2.1.3 項「Oracle Service Bus 12c でのインポート済プロセスの追加変更」

2.1.1 Oracle Service Bus 11g PS6 からの構成済プロセスのエクスポート

この項では、Oracle Service Bus 11g PS6 から構成済プロセスをエクスポートする方法について説明します。

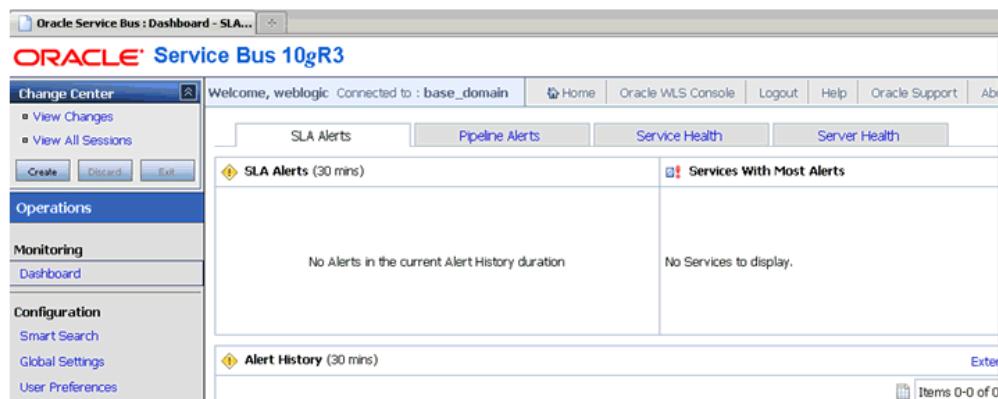
1. 構成されている Oracle WebLogic Server ドメインに対して Oracle WebLogic Server を起動します。
2. Web ブラウザで次の URL を入力して、Oracle Service Bus コンソールを開きます。
`http://host_name:port/sbconsole`

ここで、*host_name* は Oracle WebLogic Server が稼働しているシステムの名前、*port* は使用しているドメインのポートです。デフォルト・ドメインのポートは 7001 です。

3. 有効なユーザー名およびパスワードを使用して、Oracle Service Bus コンソールにログインします。

図 2-1 に示すように、Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページが表示されます。

図2-1 Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページ



4. 図 2-2 に示すように、「チェンジ・センター」領域の「作成」をクリックして、新規の Oracle Service Bus セッションを開始します。

図2-2 「チェンジ・センター」領域の「作成」ボタン



5. 図 2-3 に示すように、「インポート / エクスポート」領域の「リソースのエクスポート」をクリックします。

図2-3 「リソースのエクスポート」オプション



6. 図 2-4 に示すように、「リソースのサマリー」の下のすべての使用可能なオプション（「システム」および「デフォルト」）が選択されていることを確認し、「エクスポート」をクリックします。

図 2-4 「リソースのサマリー」領域および「エクスポート」ボタン

The screenshot shows the Oracle WLS Console interface. At the top, there are navigation links: Home, Oracle WLS Console, Logout, Help, Oracle Support, and About Service Bus. Below that, it shows 'weblogic session' information: Created 7/30/10 3:14 AM, No Conflicts, No Changes, and 2 Active Session(s). A message box at the top right says: 'Because you are exporting resources within a session, the resources configuration may be incomplete. If you want to export complete and validated configuration data, exit or activate the session and then export the resources.' The main area is titled 'Export Resources' with a radio button for 'Export Projects' (selected) and 'Export Resources'. There is also a checked checkbox for 'Include Dependencies'. Below this is a 'Resource Summary' table:

Name	Type	Last Modified	References
System	Project	---	---
default	Project	---	---

At the bottom is an 'Export' button.

7. 図 2-5 に示すように、*sbconfig.jar* ファイルを保存します。

図 2-5 *sbconfig.jar* を開くダイアログ

8. *sbconfig.jar* が正常に保存されたことを確認します。

注意: Oracle Service Bus 11g PS6 からエクスポートされた *sbconfig.jar* ファイルを、Oracle Service Bus 12c がインストールされているシステムにコピーする必要があります。

2.1.2 Oracle Service Bus 12c へのエクスポート済プロセスのインポート

この項では、エクスポート済プロセスを Oracle Service Bus 12c にインポートする方法について説明します。

前提条件

- Oracle Service Bus 12c 環境でアプリケーション・エクスプローラを使用して構成されているアダプタ・ターゲットおよびチャネルすべてが、Oracle Service Bus

11g PS6 環境内のアダプタ・ターゲットおよびチャネルと一致している必要があります。

- Oracle Service Bus 12c 環境でプロセスに対して構成されている入力および出力の場所すべてが、Oracle Service Bus 11g PS6 環境内の入力および出力の場所と一致している必要があります。

Oracle Service Bus 12c にエクスポート済プロセスをインポートするには、次の手順を実行します。

1. 構成されている Oracle WebLogic Server ドメインに対して Oracle WebLogic Server を起動します。

2. Web ブラウザで次の URL を入力して、Oracle Service Bus コンソールを開きます。

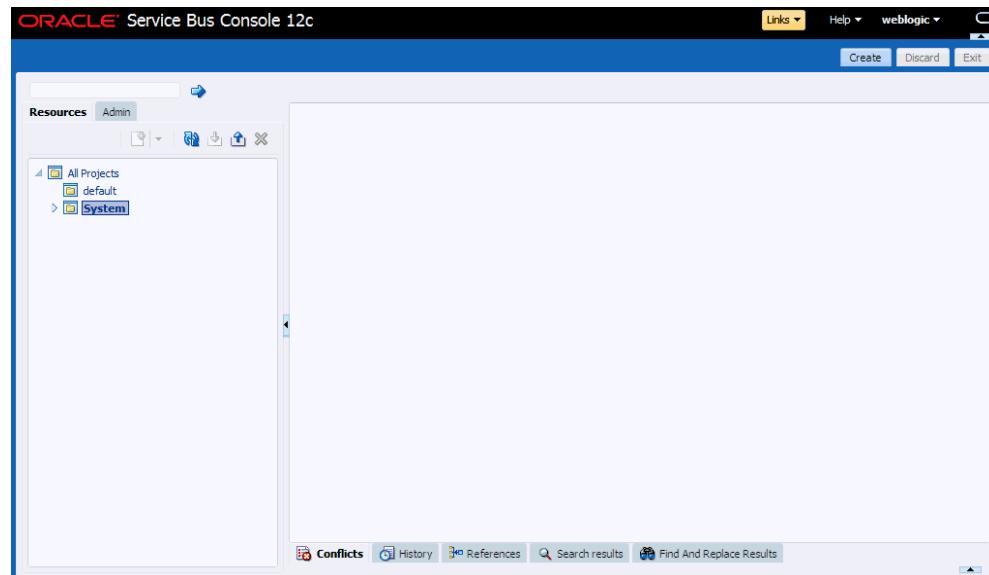
`http://host_name:port/sbconsole`

ここで、`host_name` は Oracle WebLogic Server が稼働しているシステムの名前、`port` は使用しているドメインのポートです。デフォルト・ドメインのポートは 7001 です。

3. 有効なユーザー名およびパスワードを使用して、Oracle Service Bus コンソールにログインします。

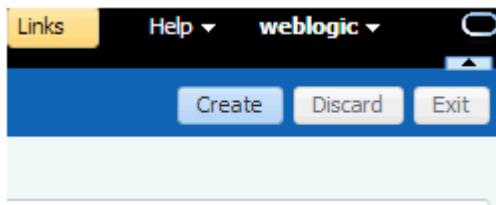
図 2-6 に示すように、Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページが表示されます。

図 2-6 Oracle Service Bus コンソールのホーム・ページ



4. 図 2-7 に示すように、右上ペインの「作成」をクリックして、新規の Oracle Service Bus セッションを開始します。

図2-7 「チェンジ・センター」領域の「作成」ボタン



5. 図 2-8 に示すように、左ペインの「構成 Jar のインポート」アイコンをクリックします。

図2-8 「構成 Jar のインポート」アイコン

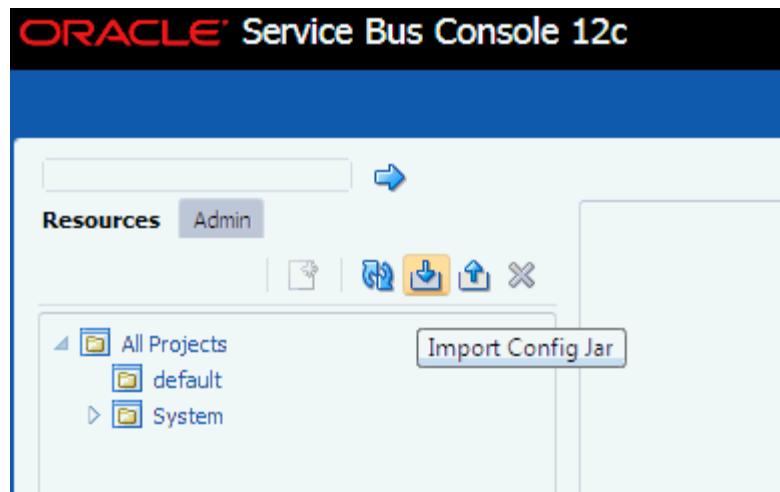
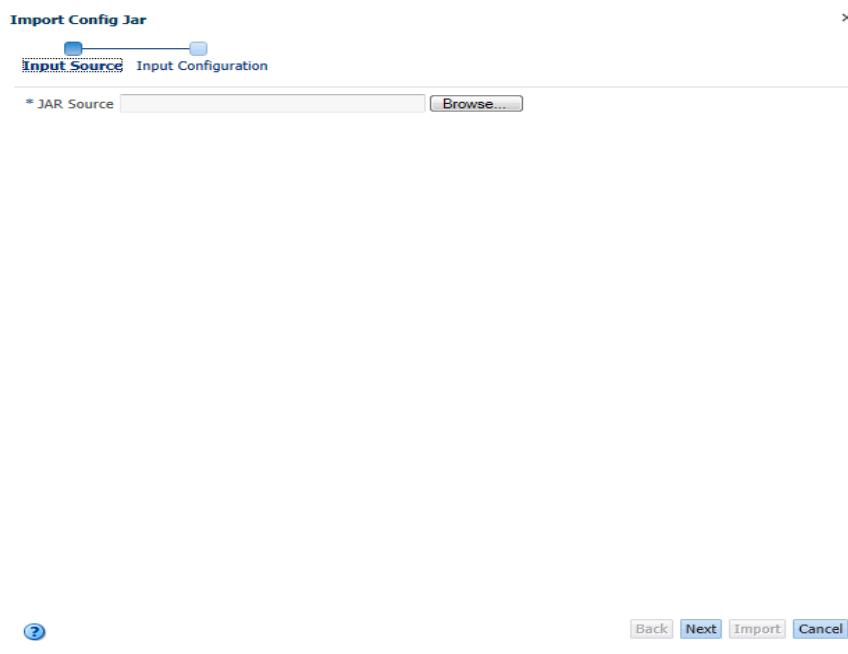


図 2-9 に示すように、「構成 Jar のインポート」ウィンドウが表示されます。

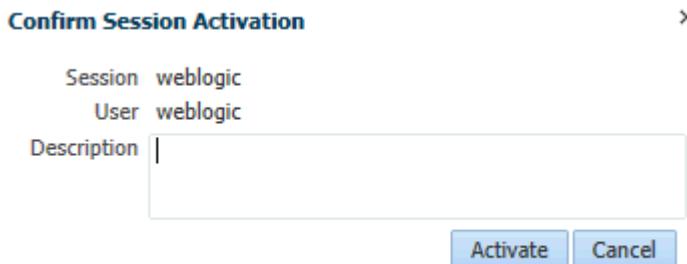
図2-9 「構成 Jar のインポート」ウィンドウ



6. 「参照」ボタンをクリックし、Oracle Service Bus 11g PS6 からエクスポートされたローカル・マシンにコピーされた sbconfig.jar ファイルを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. デフォルトで、インポートされたすべてのアイテムが「リソース」領域で選択されていることを確認し、「インポート」をクリックします。
インポートされたアイテムの詳細なステータスが表示されます。
9. 問題がないことを確認し、「閉じる」をクリックします。
SB コンソール・ページに戻ります。
10. 右上ペインの「アクティブ化」ボタンをクリックします。

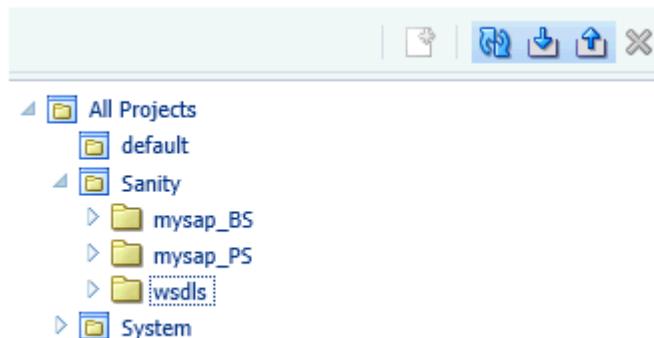
図 2-10 に示すように、「セッションのアクティブ化の確認」ウィンドウが表示されます。

図 2-10 「セッションのアクティブ化の確認」ウィンドウ



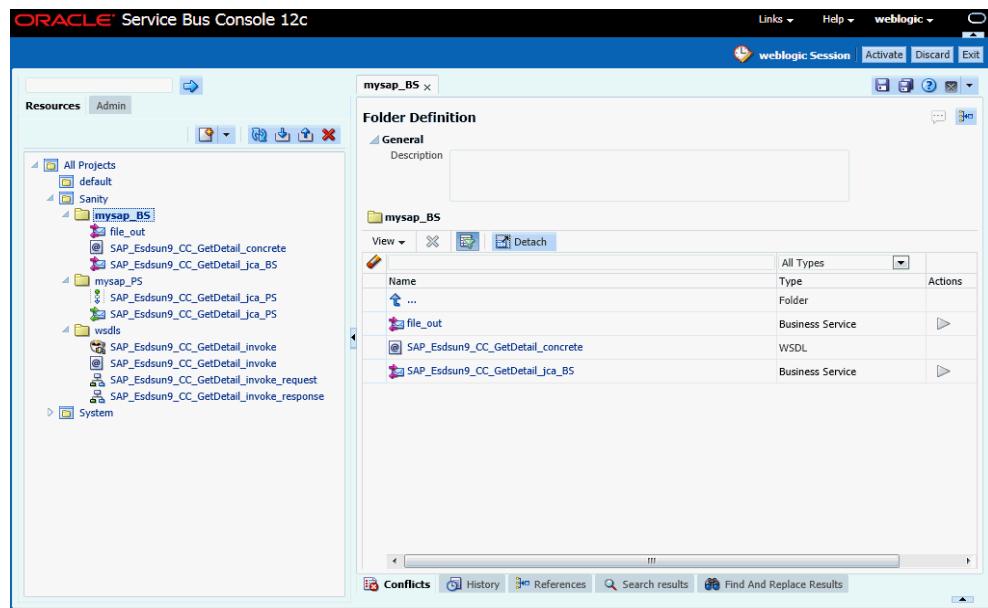
11. 「アクティブ化」をクリックします。
12. すべてのプロジェクト・フォルダがインポートされ、左ペインに表示されていることを確認します。
プロジェクト・フォルダ構造は、設定を Oracle Service Bus 11g PS6 の環境からインポートしているため、Oracle Service Bus 11g PS6 のプロジェクト・フォルダ構造と一致しているはずです。
13. 図 2-11 に示すように、プロジェクト・フォルダ（「Sanity」など）を展開します。

図 2-11 展開された「Sanity」プロジェクト・フォルダ



14. 図 2-12 に示すように、ビジネス・サービス、プロキシ・サービスおよび wsdl のフォルダを展開します。

図 2-12 展開されたフォルダ



Oracle Service Bus 11g PS6 環境で作成されたすべてのビジネス・サービス、プロキシ・サービスおよび wsdl が含まれていることを確認します。

2.1.3 Oracle Service Bus 12c でのインポート済プロセスの追加変更

この項では、Oracle Service Bus 12c にインポートされたプロセスに対して行う必要のある追加の変更について説明します。

注意： Oracle Service Bus 12c でインポートされた J2CA プロセスは、追加の変更を行わなくても適切に動作します。追加の変更が必要なのは、BSE アウトバウンド・プロセスのみです。

この節では、次のトピックについて説明します。

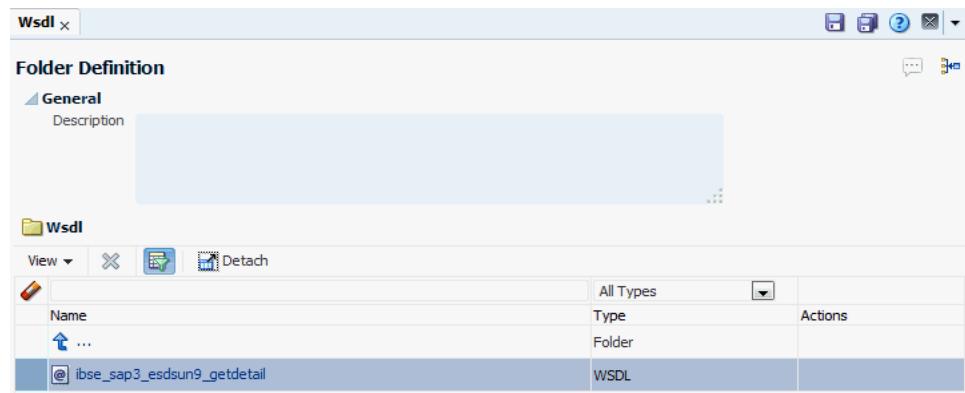
- [2.1.3.1 項「インポートされた BSE アウトバウンド・プロセス」](#)

2.1.3.1 インポートされた BSE アウトバウンド・プロセス

この項では、Oracle Service Bus 12c にインポートされた BSE アウトバウンド・プロセスに対して行う必要のある追加の変更について説明します。

1. プロジェクト・フォルダで、アダプタの WSDL ファイルが含まれるフォルダを選択します。
2. 図 2-13 に示すように、変更が必要なアウトバウンド・プロセスに対して特定の WSDL ファイルをクリックします。

図 2-13 アウトバウンド・プロセスに選択された WSDL ファイル



3. 右上ペインの「ソースの表示 / 編集」アイコンをクリックします。

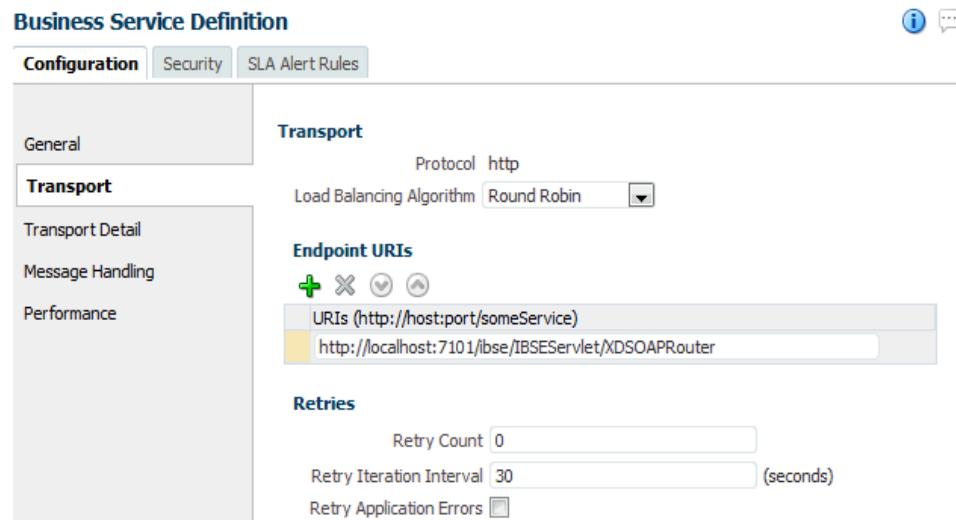
図 2-14 に示すように、「ソースの表示 / 編集」ページが表示されます。

図 2-14 WSDL ソースの編集ページ



4. <soap:address location> 要素を、OSB 12c が稼働しているシステムおよびポート番号を指すように変更します。
5. 「保存」をクリックします。
6. プロジェクト・フォルダで、BSE アウトバウンド・プロセスに作成されたビジネス・サービスを選択します。
7. 右上ペインの「作成」をクリックします。
8. 図 2-15 に示すように、右ペインで、「トランSPORT」タブを選択し、「エンドポート URI」プロパティの値を、OSB 12c が稼働しているシステムおよびポート番号を指すように更新します。

図 2-15 「トランスポート構成」タブ



注意: どちらの変更についても、最善の方法は、IP アドレスではなく `localhost` を使用することです(その場合、この変更を行う必要がありません)。

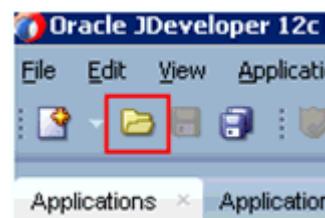
2.2 11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPEL および メディエータ・プロセスの 12c へのアップグレード

前提条件として、Oracle 12c 環境でアプリケーション・エクスプローラを使用して J2CA 構成用に作成されたアダプタ・ターゲットおよびチャネルが、Oracle 11g PS6 環境で作成されたアダプタ・ターゲットおよびチャネルと同一であることを確認してください。BSE 構成の場合は、Oracle 12c 環境でアプリケーション・エクスプローラを使用して作成されたアダプタ・ターゲットおよびビジネス・サービスが、Oracle 11g PS6 環境で作成されたアダプタ・ターゲットおよびビジネス・サービスと同一であることを確認してください。

さらに、BSE および J2CA に対する Oracle 11g PS6 の BPEL プロセスおよびメディエータ・プロセスを、Oracle 12c のアップグレード済のシステムの場所にコピーしていることを確認してください。

1. SOA QuickStart JDeveloper 12c (12.1.3.0.0) を開きます。
2. 図 2-16 に示すように、使用可能なアプリケーション(「migration-testing」など)を選択し、ツールバーの「開く」をクリックします。

図 2-16 Oracle JDeveloper のツールバー

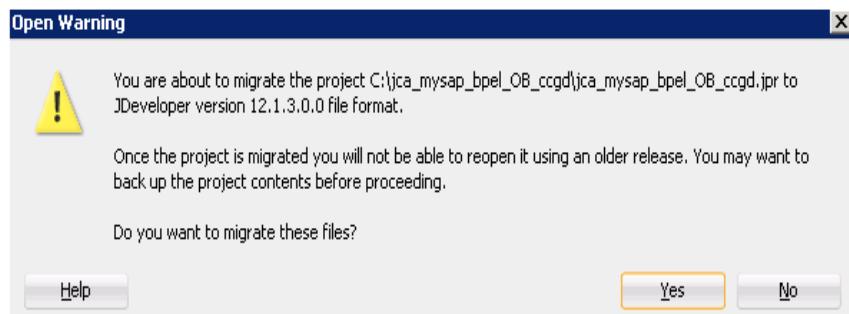


「開く」ダイアログが表示されます。

3. 11g PS6 プロジェクト (「jca_mysap_bpel_OB_ccgd」 など) を開き、.jpr 拡張子のファイル (「jca_mysap_bpel_OB_ccgd.jpr」 など) を選択します。
4. 「開く」 をクリックします。

図 2-17 に示すように、「警告」 ダイアログが表示されます。

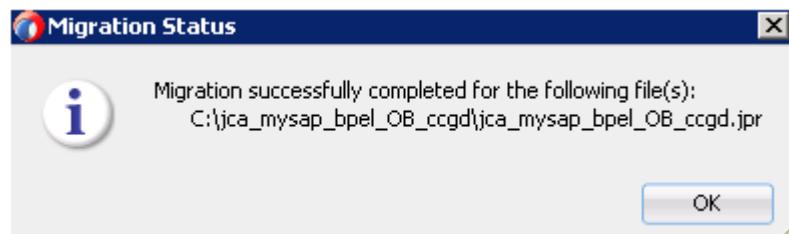
図 2-17 「警告」 ダイアログ



5. 「はい」 をクリックします。

図 2-18 に示すように、「移行ステータス」 メッセージが表示されます。

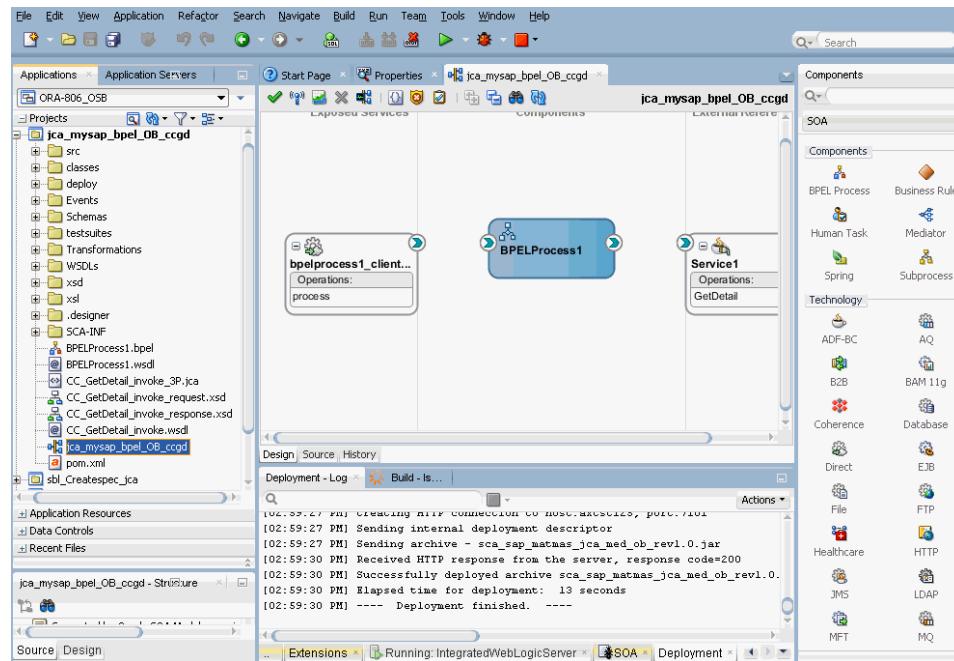
図 2-18 「移行ステータス」 メッセージ



6. 「OK」 をクリックします。

図 2-19 に示すように、Oracle 11g PS6 プロジェクトが Oracle 12c 環境で使用できるようになります。

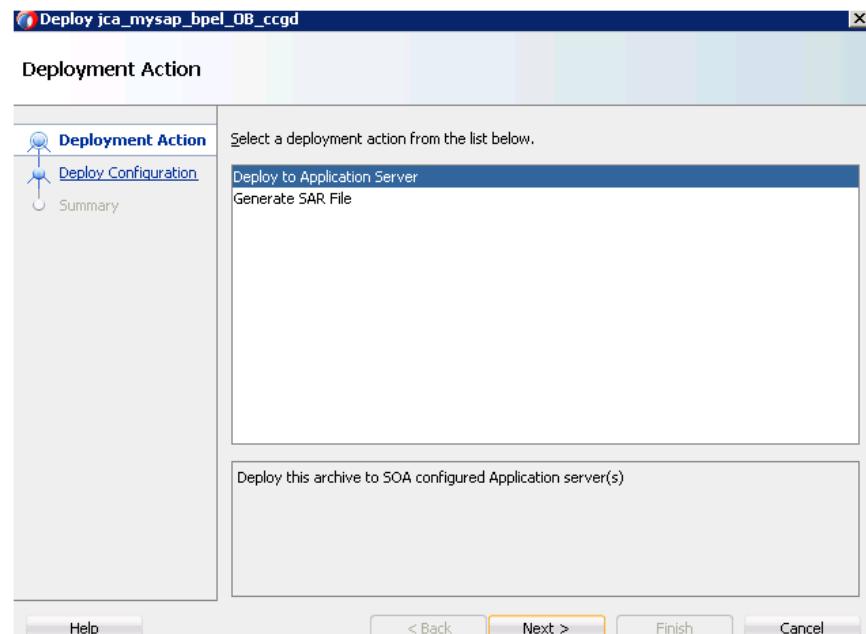
図 2-19 移行されたサンプル・プロジェクト



- 左ペインで移行済プロジェクト（「jca_mysap_bpel_OB_ccgd」など）を展開し、**composite.xml** ファイルをダブルクリックして、プロジェクトがエラーなく開くことを確認します。
- 「保存」をクリックします。
- 移行済プロジェクトを右クリックして「デプロイ」をクリックし、メニューからプロジェクト名（「jca_mysap_bpel_OB_ccgd」など）を選択します。

図 2-20 に示すように、「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。

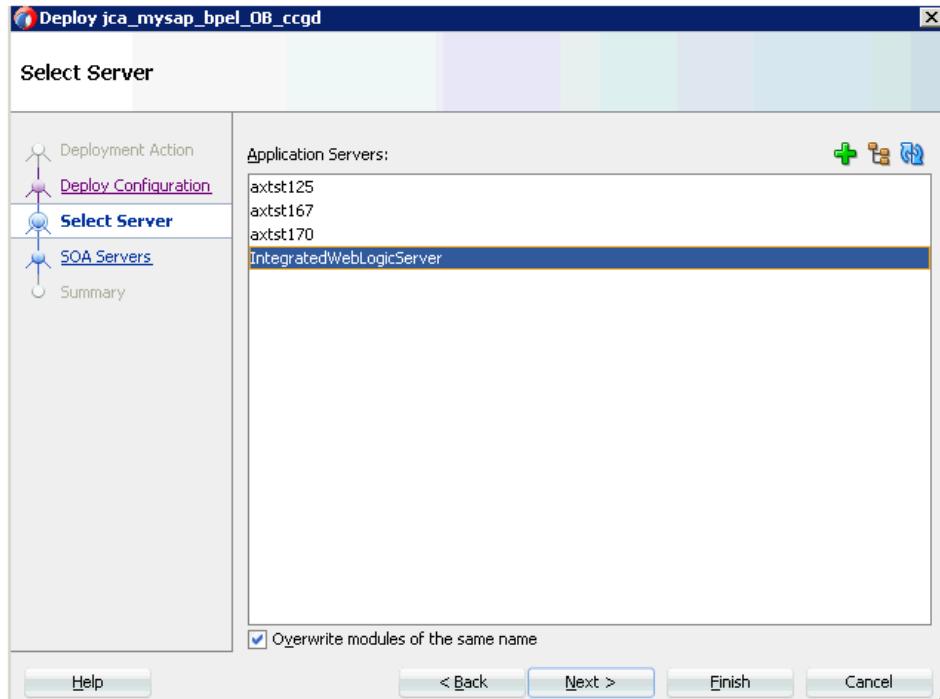
図 2-20 「デプロイメント・アクション」ページ



10. 「アプリケーション・サーバーにデプロイ」が選択されていることを確認します。
11. 「次へ」をクリックします。
「構成のデプロイ」ページが表示されます。
12. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。

図 2-21 に示すように、「サーバーの選択」ページが表示されます。

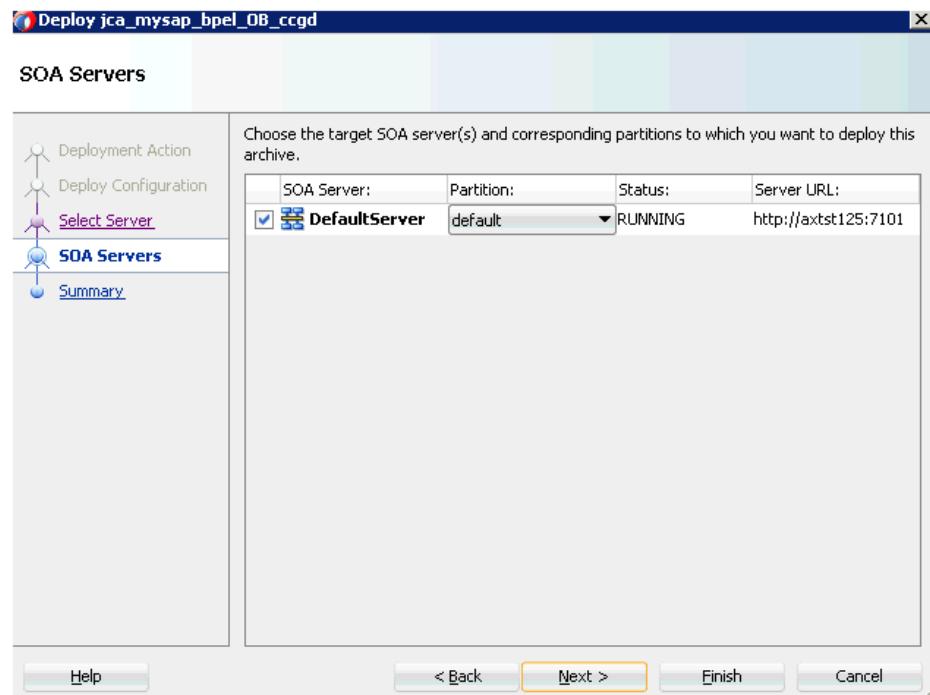
図 2-21 「サーバーの選択」ページ



13. 構成済のサーバーを選択し、「次へ」をクリックします。

図 2-22 に示すように、「SOA サーバー」ページが表示されます。

図 2-22 「SOA サーバー」 ページ



14. 「パーティション」リストからパーティションを選択し、「次へ」をクリックします。
「サマリー」ページが表示されます。
15. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。
16. 図 2-23 に示すように、コンパイルおよびデプロイメント中のエラーと警告のメッセージがデプロイメント・ログに記録されていないことを確認します。

図 2-23 デプロイメント・ログ

```

[04:16:12 PM] Creating HTTP connection to host:axtst125, port:7101
[04:16:12 PM] Sending internal deployment descriptor
[04:16:12 PM] Sending archive - sca_jca_mysap_bpel_0B_ccgd_rev1.0.jar
[04:16:14 PM] Received HTTP response from the server, response code=200
[04:16:14 PM] Successfully deployed archive sca_jca_mysap_bpel_0B_ccgd_rev1.0
[04:16:14 PM] Elapsed time for deployment: 14 seconds
[04:16:14 PM] ---- Deployment finished. ----

```

17. 図 2-24 および図 2-25 に示すように、デプロイメントが正常に完了したら、Oracle Enterprise Manager コンソールを開き、「ツリー表示」または「XML 表示」でデプロイ済プロセスを実行し、成功レスポンスを受信します。

図 2-24 XML 表示での入力 XML

The screenshot shows the Oracle SOA Infrastructure Test Web Service interface. The left sidebar shows 'Target Navigation' with 'jca_mysap_bpel_OB_ccgd [1.0]' selected. The main area is titled 'Test Web Service' for 'jca_mysap_bpel_OB_ccgd [1.0]'. It displays the WSDL or WADL URL: http://axst125:7101/soa-infra/services/default/jca_mysap_bpel_OB_ccgd/bpelprocess1_client_ep?WSDL. The 'Request' tab is selected, showing the XML payload:

```

<soap:Envelope xmlns:soap="http://schemas.xmlsoap.org/soap/envelope/">
  <soap:Body xmlns:bapi="urn:sap-com:document:sap:business">
    <bapi:CompanyCode.GetDetail COMPANYCODEID="1000"/>
  </soap:Body>
</soap:Envelope>

```

図 2-25 受信された出力 XML

The screenshot shows the Oracle SOA Infrastructure Test Web Service interface. The 'Response' tab is selected. The 'Test Status' is 'Request successfully received.' The 'Response Time (ms)' is 30100. The 'XML View' tab is selected, showing the generated flow instance and the XML response payload:

```

</wsa:FaultTo>
</env:Header>
<env:Body>
  <CompanyCode.GetDetail.Response xmlns="urn:sap-com:document:sap:business:response">
    <COMPANYCODE_ADDRESS>
      <ADDR_NO>0000000121</ADDR_NO>
      <FORMOFADDR>Firma</FORMOFADDR>
      <NAME>Ides AG</NAME>
      <NAME_2>Martin Steiner, Kathrin Walther,</NAME_2>
      <NAME_3>Bernd Zecha, Dondogmaa
      <NAME_4>IDES intern</NAME_4>
      <C_O_NAME/>
      <CITY>Frankfurt</CITY>
    </COMPANYCODE_ADDRESS>
  </CompanyCode.GetDetail.Response>
</env:Body>

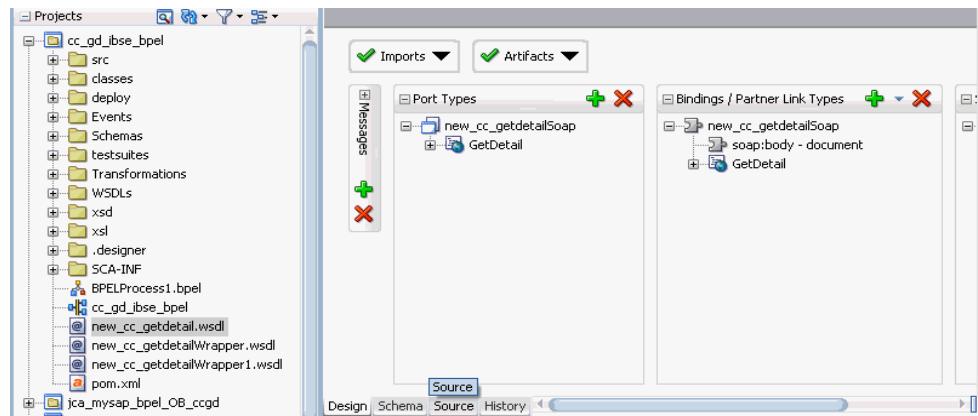
```

2.2.1 12c での移行済プロセスの追加変更

12c でアップグレードされた J2CA アウトバウンド・プロセスおよびインバウンド・プロセスは、追加の変更を行わなくても適切に機能します。追加の変更が必要なのは BSE アウトバウンド・プロセスのみで、これについてはこの項で説明します。

1. BSE アウトバウンド・プロセスの 12c への移行が正常に完了したら、**composite.xml** ファイルをダブルクリックして、移行済プロジェクトを開きます。
2. 図 2-26 に示すように、BSE アウトバウンド WSDL ファイルをダブルクリックし、「ソース」タブをクリックします。

図 2-26 BSE アウトバウンド WSDL ファイル



3. <soap:address location> 要素を、12c が稼働しているシステムおよびポート番号を指すように変更します。

次に例を示します。

```
<service name="mysap_isdsrv2_compcode_getdetail">
<soap:address
location="http://172.19.95.190:7003/ibse/IBSEServlet/XDSOAPRouter"/>
</port>
</service>
</definitions>
```

注意: どちらの変更についても、最善の方法は、IP アドレスではなく localhost を使用することです（その場合、この変更を行う必要がありません）。

4. プロセスを保存し、デプロイします。

2.3 11g PS6 アウトバウンドおよびインバウンド BPMN プロセスの 12c へのアップグレード

前提条件として、Oracle 12c 環境でアプリケーション・エクスプローラを使用して J2CA 構成用に作成されたアダプタ・ターゲットおよびチャネルが、Oracle 11g PS6 環境で作成されたアダプタ・ターゲットおよびチャネルと同一であることを確認してください。BSE 構成の場合は、Oracle 12c 環境でアプリケーション・エクスプローラを使用して作成されたアダプタ・ターゲットおよびビジネス・サービスが、Oracle 11g PS6 環境で作成されたアダプタ・ターゲットおよびビジネス・サービスと同一であることを確認してください。

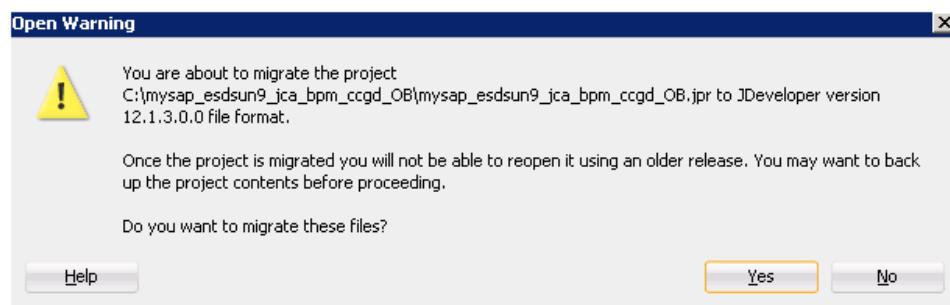
さらに、BSE および J2CA に対する Oracle 11g PS6 のプロセスを、Oracle 12c のアップグレード済のシステムの場所にコピーしていることを確認してください。

1. BPMN QuickStart JDeveloper 12c (12.1.3.0.0) を開きます。
2. 使用可能なアプリケーション（「BPM_Migration_Testing」など）を選択し、ツールバーの「開く」をクリックします。
「開く」ダイアログが表示されます。
3. 11g PS6 プロジェクト（「mysap_esdsun9_jca_bpm_ccgd_OB」など）を開き、.jpr 拡張子のファイル（「mysap_esdsun9_jca_bpm_ccgd_OB.jpr」など）を選択します。

4. 「開く」をクリックします。

図 2-27 に示すように、「警告」ダイアログが表示されます。

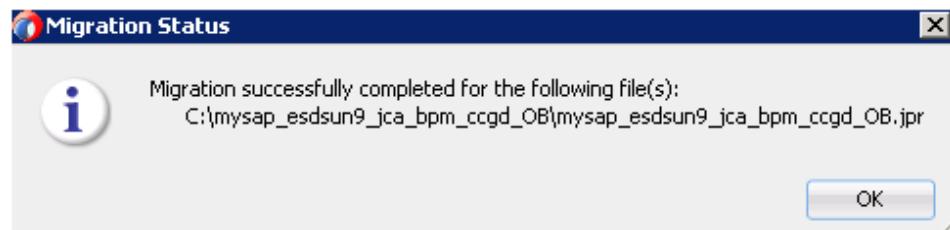
図 2-27 「警告」ダイアログ



5. 「はい」をクリックします。

図 2-28 に示すように、「移行ステータス」メッセージが表示されます。

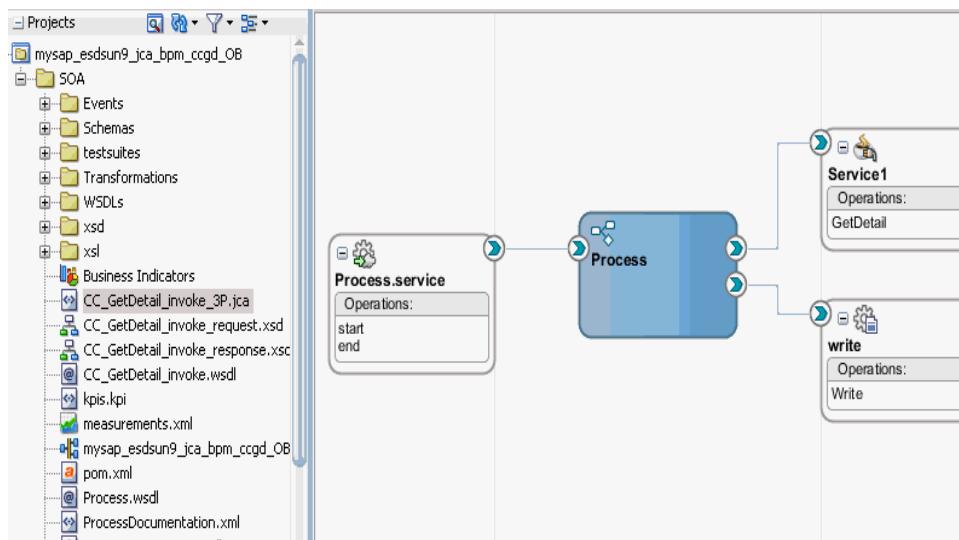
図 2-28 「移行ステータス」メッセージ



6. 「OK」をクリックします。

図 2-29 に示すように、Oracle 11g PS6 プロジェクトが Oracle 12c 環境で使用できるようになります。

図 2-29 移行されたサンプル・プロジェクト



7. 左ペインで移行済プロジェクト（「mysap_esdsun9_jca_bpm_ccgd_OB」など）を開き、**composite.xml** ファイルをダブルクリックして、プロジェクトがエラーなく開くことを確認します。
8. 「保存」をクリックします。
9. 移行済プロジェクトを右クリックして「デプロイ」をクリックし、メニューからプロジェクト名（「mysap_esdsun9_jca_bpm_ccgd_OB」など）を選択します。「デプロイメント・アクション」ページが表示されます。
10. 「アプリケーション・サーバーにデプロイ」が選択されていることを確認します。
11. 「次へ」をクリックします。
12. デフォルト値を選択したままにし、「次へ」をクリックします。
13. 構成済のサーバーを選択し、「次へ」をクリックします。
14. 「パーティション」リストからパーティションを選択し、「次へ」をクリックします。
15. 「ソアサーバー」ページが表示されます。
16. 「構成済のサーバー」を選択し、「次へ」をクリックします。
17. 「サマリー」ページが表示されます。
18. プロジェクトに使用可能なすべてのデプロイメント情報をレビューおよび確認し、「終了」をクリックします。
19. コンパイルおよびデプロイメント中のエラーや警告のメッセージがデプロイメント・ログに記録されていないことを確認します。
20. 図 2-30 および図 2-31 に示すように、デプロイメントが正常に完了したら、Oracle Enterprise Manager コンソールを開き、「ツリー表示」または「XML 表示」でデプロイ済プロセスを実行し、成功レスポンスを受信します。

図 2-30 XML 表示での入力 XML

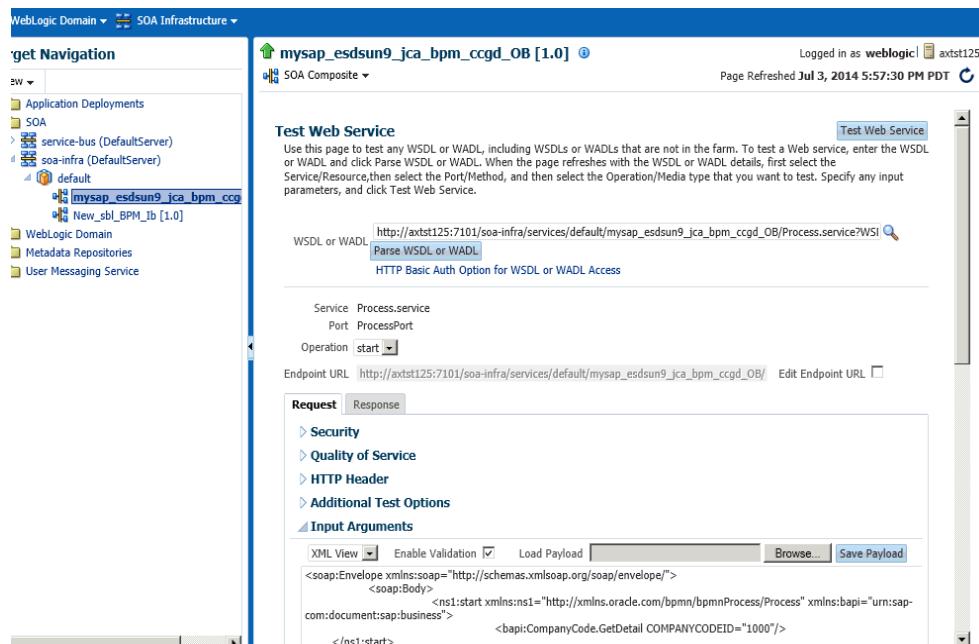
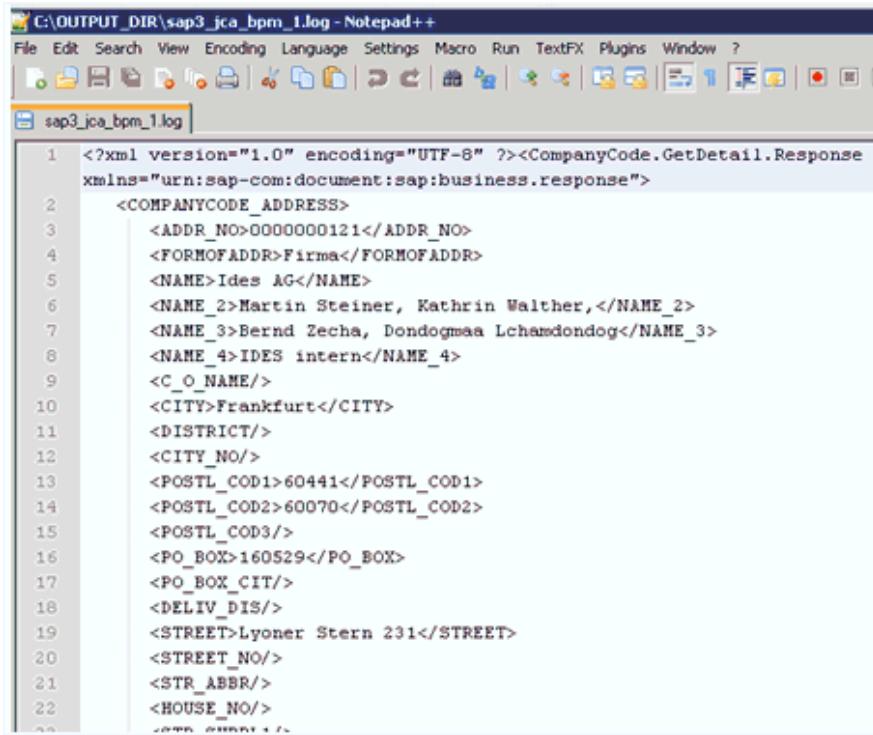


図 2-31 受信された出力 XML



```

1  <?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?><CompanyCode.GetDetail.Response
2    xmlns="urn:sap-com:document:sap:business.response">
3    <COMPANYCODE_ADDRESS>
4      <ADDR_NO>0000000121</ADDR_NO>
5      <FORMOFADDR>Firma</FORMOFADDR>
6      <NAME>Ides AG</NAME>
7      <NAME_2>Martin Steiner, Kathrin Walther,</NAME_2>
8      <NAME_3>Bernd Zecha, Dondogmaa Lchamdondog</NAME_3>
9      <NAME_4>IDES intern</NAME_4>
10     <C_O_NAME/>
11     <CITY>Frankfurt</CITY>
12     <DISTRICT/>
13     <CITY_NO/>
14     <POSTL_COD1>60441</POSTL_COD1>
15     <POSTL_COD2>60070</POSTL_COD2>
16     <POSTL_COD3/>
17     <PO_BOX>160529</PO_BOX>
18     <PO_BOX_CIT/>
19     <DELIV_DIS/>
20     <STREET>Lyoner Stern 231</STREET>
21     <STREET_NO/>
22     <STR_ABBR/>
23     <HOUSE_NO/>
24   </COMPANYCODE_ADDRESS>
25 </CompanyCode.GetDetail.Response>

```

2.3.1 12c での移行済プロセスの追加変更

12c でアップグレードされた J2CA アウトバウンド・プロセスおよびインバウンド・プロセスは、追加の変更を行わなくても適切に機能します。追加の変更が必要なのは BSE アウトバウンド・プロセスのみで、これについてはこの項で説明します。

1. BSE アウトバウンド・プロセスの 12c への移行が正常に完了したら、**composite.xml** ファイルをダブルクリックして、移行済プロジェクトを開きます。
2. BSE アウトバウンド WSDL ファイルをダブルクリックし、「ソース」タブをクリックします。
3. **<soap:address location>** 要素を、12c が稼働しているシステムおよびポート番号を指すように変更します。

次に例を示します。

```

<soap:address
  location="http://172.19.95.190:7003/ibse/IBSEServlet/XDSOAPRouter"/>
  </port>
</service>
</definitions>

```

注意： どちらの変更についても、最善の方法は、IP アドレスではなく `localhost` を使用することです（その場合、この変更を行う必要がありません）。

4. プロセスを保存し、デプロイします。

用語集

アダプタ

ある電子インターフェースによる他の電子インターフェースへの（機能を失わない）対応を可能にすることにより、汎用的な接続性を提供します。

エージェント

リスナーとドキュメントでサービス・プロトコルをサポートします。

ビジネス・サービス

Web サービスとしても知られます。Web サービスは、独立型でモジュール化された機能で、オープン標準を使用したネットワーク間での公開およびアクセスが可能です。コンポーネント別のインターフェースの実装で、実行可能なエンティティです。

チャネル

バックエンド・システムの特定のインスタンスへの構成済接続を表します。チャネルは、1つ以上のイベント・ポートをアダプタで管理される特定のリスナーにバインドします。

リスナー

クライアント・アプリケーションからのリクエストを受け入れるコンポーネントです。

ポート

アダプタにより公開される特定のビジネス・オブジェクトを特定の配置と関連付けます。この場合の配置とは、プロトコルおよびイベント・データの場所を定義する URL です。ポートはイベント使用のエンドポイントを定義します。

索引

o

Oracle Unified Method (OUM), vi

あ

アップグレード・ガイドライン
一般的, 2-1

い

一般的なアップグレード・ガイドライン, 2-1

